朝日歌壇

朝日俳壇

〈日曜日のブローチ　47〉　junaida

佐佐木幸綱選

鴨たちが去ってからっぽの湖に二ひら三ひらの春の雲浮く　（名古屋市）磯前　睦子

明るくておっとりのんびり社交的熱海気質の力士を愛でる　（富士市）村松　敦視

「桜が咲くまでは来ますよ」お別れが近づいている焼き芋屋さん　（東京都）上田　結香

翡翠は淋しからずや縄張りのこの植物園に一羽だけ棲むと　（船橋市）梅本　咲子

快速は軽く傾ぎて窓外に石狩湾の海の春色　（札幌市）伊藤　哲

金メダル金目鯛かと聞き違えとんちんかんな二人の暮らし　（深谷市）高木　昭子

ひかり満ち菜の花の咲く土手道を自転車に乗りゆっくり走る　（東京都）森　小犀

母と妻が競いて植えし椿なり美しく咲くことのわびしさ　（鳥取県）表　いさお

病床の母が我の名間違えず呼べた十五分の面会　（久留米市）春日　登

見たくなきおのれの姿見るやうな作り笑ひの高市早苗　（羽咋市）北野みや子

【評】第一首、春になって鴨たちが北へ飛び去った直後の空虚感。「からっぽの湖」、うまい。第二首、小結・熱海富士への讃歌。「明るくておっとりのんびり社交的」という「熱海気質」、楽しい。第三首、直接話法の使い方に注目。

高野公彦選

三万日の使用に耐へし喉と胃に謝してこよひも数献捧ぐ　（東京都）上田　国博

たった5秒で勝敗決まるときもあり大相撲という格闘技見事　（宮城県）三宅　由里

九条が世界すべての法ならばさぞこの星も住み易からむを　（横浜市）白川　修

テレビより「第九」流れてくる夜に憲法第九を読み返しおり　（橋本市）秋月　晶江

ホルムズは封鎖されたり黒煙の手前に白き鳥の群れ飛ぶ　（長野市）関　龍夫

ミモザ色の新聞届く弥生八日妻に買いしはプチモンブラン　（千曲市）米沢　光人

君が代と海ゆかばとの哀調を戦すまじと聞きいる八十路　（四国中央市）石川　明憲

AIが自分の言葉話せたら戦争には使うなときっと言う　（三重県）榎本　真弓

初任給アップの記事を読むたびに悲しく見つめる年金明細　（浦安市）野田　充男

そこはかとないかなしみは生きているかなしみ午前三時にめざめ　（新潟市）太田千鶴子

【評】1首目、生後三万日の作者は八十余歳。喉と胃に感謝して酒を楽しむ。2首目、激しくぶつかり合って僅か5秒で勝負が決まることもある大相撲。その集中力に感嘆する作者。3首目と4首目、憲法九条の尊さを讃える心。

永田和宏選

味噌汁の椀にもビールのジョッキにもなった研究室のビーカー　（長野市）原田　浩生

バァバにはなれないけれどお婆さん鏡の中の白髪の人よ　（名古屋市）秋山　順子

いつまでも日本最東端の島だけであって欲しい南鳥島　（八千代市）砂川　壮一

あれほどの少女らが一度に死んだとてガソリン値段しか気にならぬ国　（五所川原市）戸沢大二郎

さっきまでそこは確かに教室だった破れちぎれた少女たちの絵　（上越市）大堀　みき

ふぐり大き猫歩き行く古寺の庭の半ばを冬の陽が占む　（狭山市）奥薗　道昭

母のいない母のベッドに横になる母が見ていた天井見つめ　（佐世保市）近藤　福代

傘をさす人さしていない人どちらにも舞う春の淡雪　（京都市）小西　すず

鳥海に種まき爺さんらしき人うっすら見えて庄内に春　（横浜市）白川　修

あの日から誕生日ではなくなりしと妹は風の電話に祈る

【評】原田さん、どこにでも見られたかつての研究室の日常。秋山さん、孫からバァバと呼ばれることはないけれど、見かけはまさにお婆さんと自らを。砂川さん、核のゴミの最終処分場候補にあがっている南鳥島。ただの島であって欲しいと。

川野里子選

ミレー展帰りのバスで級友は葡萄農家を継ぐよと言った　（甲府市）村崎　残滓

道路とは人が主役で車ではないと言いたい四万人走る　（江別市）長橋　敦

進撃の巨人を百倍したほどの巨大な笑顔で孫やってくる　（船橋市）藤本　典裕

統計課　人を数字にしてやっと守れる心があるということ　（四街道市）かきもちもちり

右の氷左の氷と踏み割れば始業の鐘が遠くに聞こゆ　（東京都）里見　脩一

「ブリが悪い」笑われ真面目に悩んだがセクハラに協力しなかっただけ　（東京都）上田　結香

見て匂い味わう絶食後の重湯飲めば我が聞くはらわたの音　（八王子市）額田　浩文

長生きのキャラに声優追いつけず一人去りまた一人去るなり　（川崎市）赤木不二男

労働と生活保護の境界に立ちまた半値の惣菜を買う　（君津市）八号坂唯一

リクルートパンプスが鳴らすコツコツはたぶん私の足音じゃない　（流山市）汐入　音佳

【評】一首目、ミレーの農村や労働への崇敬が級友に大事な決心をさせたのだ。二首目、マラソンの時のみ道路は人のものになる。三首目、さてはお小遣いをねだる笑顔か。四首目、弱者の心は統計上の数字としてのみ見えることがあるのだ。

俳句時評　二つの子規句集

岸本　尚毅

復本一郎選『新選　正岡子規俳句集』が刊行された。岩波文庫では一九四一年初版の高浜虚子選『子規句集』以来、八十五年ぶりの子規句集だ。

虚子は改造社版全集の一万八千余句から二三〇六句、復本は講談社版全集の二万三千余句から一五八三句を選んだ。子規の膨大な句を厳選した句集には選者の俳句観が自ずと投影される。

たとえば子規の代表句〈**鶏頭の十四五本もありぬべし**〉を虚子は採らなかった。このことも含め、この句の評価は後に議論になった（いわゆる「鶏頭論争」）。復本選も興味深い。たとえば〈**辜丸の垢取る冬の日向哉**〉は病人子規の自嘲めいた自画像か。ただの滑稽句とも思えない。この句を虚子は採らなかった。

子規が一八九六年（明治二九）に詠んだ蚊遣の句は二十二句。うち虚子選は〈**旅籠屋の飯くふそばに蚊遣哉**〉など四句。復本選は虚子も採った「旅籠屋の」と〈**蚊遣火や赤子煮え居る鍋の中**〉の二句。前書に「妖怪体」とある「赤子煮え居る」を、虚子は採らなかった。いっぽう虚子が採った〈**蚊遣火や老母此頃わづらひぬ**〉を、復本は採っていない。

虚子選の基調には「花鳥諷詠」という俳句観があった（『子規句集』解説・坪内稔典）。いっぽう「辜丸の垢」や「赤子煮え居る」を採った復本は江戸俳諧の研究者であり、虚子が逸した滑稽句などの子規俳句の多様さに目を向ける。

寒川鼠骨編『古今滑稽俳句集』に採録された〈**内のチョマが隣のタマを待つ夜かな**〉は猫の恋を詠んだ愉快な句。この句は虚子も復本も採っている。（俳人）

風信

梶原さい子著「震災短歌ノート」　朝日新聞みちのく歌壇選者の著者が震災に関わる短歌についての論考やエッセー、講演録、聞き書きなどをまとめた一冊。（短歌研究社・2750円）

穂村弘著「短歌の話は長くなる」　「NHK短歌」誌上の対談連載をまとめた第2弾。対談相手として朝日歌壇の常連投稿者・松田梨子、わこさんも登場。（NHK出版・2200円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき